

わたしたちは、予防医学を通じて人々の「生涯健康」「健康寿命の延伸」をめざし、健康と福祉の向上に努めることにより、社会に貢献してまいります。

# よぼう医学

THE NEWS OF HEALTH SERVICE

(公財)東京都予防医学協会  
予防医学事業中央会東京都支部  
発行人 北川照男・編集人 山内邦昭

発行所 〒162-8402  
東京都新宿区市谷砂土原町1-2  
保健会館 電話 03-3269-1131

http://www.yobouigaku-tokyo.or.jp

毎月15日発行

## これからののがん検診

第21回日本がん検診・診断学会総会より

### 国内外の新たな知見踏まえ 検診の現状や課題を討議

住民検診や人間ドックなどで行われているがん検診。検診を受けることで、集団の死亡率や個人の死亡リスクを下げる効果が期待されている。一方、がん検診にはこうした利益がある反面、偽陰性や偽陽性、過剰診断、過剰治療などといった不利益もあり、実施に際しては、利益と不利益のバランスが決め手となる。このため国は、「がん予防重点健康教育及びがん検診実施のための指針」を定めて有効ながん検診の方法を示すと共に、新たな知見を踏まえた見直し作業を進めている。こうした中、7月19、20日の2日間、群馬・前橋市で開催された第21回日本がん検診・診断学会総会(会長・鈴木和浩群馬大学大学院医学系研究科教授)では、今後のがん検診の在り方をめぐって、多数の講演やシンポジウムなどが行われた。

わが国のがん検診は、市町型検診の2つに分けられる。村や職場などで行われる対策型検診と、個人が希望して受診する人間ドックなどの任意型検診とに分けられる。対策型検診は、公共的な予防政策として行われ、対象集団におけるがんの死亡率を減

少させることが目的である。従って、死亡率減少効果が科学的に証明されていることが原則とされている。一方、任意型検診は、医療機関や検診機関が任意で提供する保健サービスで、個人の死亡リスクを減少させることが目的である。最新の検査が受けられる反面、死亡率減少効果が証明されていないものも含まれる。

このため国立がん研究センターの「がん検診の適切な方」や「I」とされている検査に、ガイドラインで、死亡率減少効果を示す証拠が不十分であると推奨グレード

法とその評価法の確立に関する研究」班では、がん検診に関する国内外の文献を収集・整理し、死亡率減少効果を吟味。さらに利益と不利益のバランスを勘案し、個々の検査方法の推奨グレード(表を定めて「がん検診ガイドライン」として示している。このガイドラインは、国の指針作成にも活用されている。

肺がん検診での低線量CT、前立腺がん検診でのPSA検査、子宮頸がん検診でのHPV検査、胃がん検診での胃内視鏡検査などがある。しかし、これらの検査の多くは、既にわが国で広く行われており、対策型検診として採用している市町村もあるなど、必ずしも統一されていない。

総会では、がん検診の有効性に関する国内外の新たな知見や不利益を小さくするため、取り組みなどが報告され、ガイドラインの見直しも視野に入れた提言も行われた。

このうち、パネルディスカッション「各種がん検診におけるメリットとデメリット」では、JA長野厚生連小諸厚生総合病院放射線科の丸山雄一郎部長が、近年米国内で行われたRCT(無作為比較対照試験)や国内の研究で、低線量CTによる肺がん検診の死亡率減少効果が確認されたことなどを紹介し、次のように述べた。

「CT検診にはこうした利益の他に、偽陽性や過剰診断、放射線被ばくなどの不利益も

存在する。わが国では年間数万人がCT検診を受けており、低線量撮影の徹底など、不利益を最小限に抑える努力が必要である」

また、JA岐阜厚生連中濃厚生病院泌尿器科の宇野裕巳部長は、前立腺がんのPSA検査について、高齢者における基準値の引き上げや検診間隔の延長、MRIの活用、新しい腫瘍マーカーの登場などで過剰診断の回避が可能となってきていることや、過剰治療対策として、

リスクの低い前立腺がんに対しては、すぐに治療せず経過を観る「PSA監視療法」が行われていることを紹介した。一方、子宮頸がん検診でのHPV検査については、細胞診との併用検診が、本年度から有効性の検証事業として始まっている。

シンポジウム「日常臨床の場におけるがん検診」で講演した自治医科大学さいたま医療センター産婦人科の今野良教授は、「HPV検査は細胞診より感度が20〜30%高く、特異度が3%くらい低い。この2つを組み合わせるのが重要」とした上で、既に海外では多くの国で併用検診が行われていることや、近年ではHPV単独検診に着手する国も増えつつあることを紹介。「今後、HPVワクチンの普及と共にHPV検査をベースとした効率のよい子宮頸

がん検診に移行すべき」と強調した。理事長講演で、「理想的ながん検診とは」と題して講演した日本がん検診・診断学会の金子昌弘理事長(本会呼吸器科部長)は、「がんを早期発見する検診から、がんになるリスクを発見し、がんを予防する検診へとがん検診の在り方が変わりつつある」として、①偽陰性の少ない検体検査の開発と普及②がん予防活動と運動したがん検診③ハイリスク群への高精度検診の導入④リスクの治療で発がんの予防の4つのポイントをあげ、「受けていなければがんにならない検診が理想のがん検診と言える」と述べた。

総会ではこの他、「各種がん検診の精度管理の実態と対策」や「テラーメイドがん検診の現状と将来展望」などをテーマにシンポジウムも行われた。

シンポジウム「日常臨床の場におけるがん検診」で講演した自治医科大学さいたま医療センター産婦人科の今野良教授は、「HPV検査は細胞診より感度が20〜30%高く、特異度が3%くらい低い。この2つを組み合わせるのが重要」とした上で、既に海外では多くの国で併用検診が行われていることや、近年ではHPV単独検診に着手する国も増えつつあることを紹介。「今後、HPVワクチンの普及と共にHPV検査をベースとした効率のよい子宮頸

がん検診に移行すべき」と強調した。理事長講演で、「理想的ながん検診とは」と題して講演した日本がん検診・診断学会の金子昌弘理事長(本会呼吸器科部長)は、「がんを早期発見する検診から、がんになるリスクを発見し、がんを予防する検診へとがん検診の在り方が変わりつつある」として、①偽陰性の少ない検体検査の開発と普及②がん予防活動と運動したがん検診③ハイリスク群への高精度検診の導入④リスクの治療で発がんの予防の4つのポイントをあげ、「受けていなければがんにならない検診が理想のがん検診と言える」と述べた。



#### ● 今月の主な紙面 ●

- (1面) ● これからのがん検診  
第21回日本がん検診・診断学会総会より
- (2・3面(見開き))
  - 連載 予防医学事業のこれまでとこれから 第12回
  - 話題 50周年を迎えた米国の新生児スクリーニング「過去の成果を祝し未来に備えて」と題し国際学会
  - 連載 健康づくり・健康増進を支援するページ 健康相談ピフォーアフター 第3回:保健師/管理栄養士/健康運動指導士からのアドバイス
- (4面) ● 250回を迎えたヘルスケア研修会  
「宇宙医学から学ぶ健康管理」テーマに記念講演
  - 「東京都予防医学協会賞」PKU親の会・関東総会で4人を表彰
  - 連載 ALCAだより 第2回
  - 「学校保健相談室」で支援一本会

表 国立がん研究センター「がん検診ガイドライン」推奨グレード(一部改変)

推奨	表現	対策型検診(住民検診型)	任意型検診(人間ドック型)	証拠のレベル
A	死亡率減少効果を示す十分な証拠があるので、実施することを強く勧める。	推奨する	推奨する	十分な証拠あり
B	死亡率減少効果を示す相応な証拠があるので、実施することを勧める。	推奨する	推奨する	相応な証拠あり
C	死亡率減少効果を示す証拠があるが、無視できない不利益があるため、対策型検診として実施することは勧められない。任意型検診として実施する場合には安全性を確保し、不利益に関する説明を十分に行い、受診するかどうかを個人が判断できる場合に限り、実施することができる。	推奨しない	条件付きで実施できる	十分あるいは相応な証拠あり
D	死亡率減少効果が無いことを示す証拠があるため、実施すべきではない。	推奨しない	推奨しない	十分あるいは相応な証拠あり
I	死亡率減少効果の有無を判断する証拠が不十分であるため、対策型検診として実施することは勧められない。任意型検診として実施する場合には、効果が不明であることと不利益について十分説明する必要がある。その説明に基づく、個人の判断による受診は妨げない。	推奨しない	個人の判断に基づく受診は妨げない	証拠不十分

#### 個人情報の取扱いについて

日頃より、東京都予防医学協会の機関紙「よぼう医学」をご愛読くださりありがとうございます。本会では、現在「よぼう医学」を送付させていただいている皆様について、送付に必要な情報(名前、住所、所属、役職など)を送付名簿として保持しております。これらの個人情報の収集、保存、利用につきましては、本会の個人情報保護方針に基づき、厳重な管理のもとに運用しております。その上で今後も継続して送らせていただきたいと思います。送付名簿から削除を希望される場合には、お手数ですが、広報室(電話03-3269-1131)までご連絡ください。

#### 送付先の変更・中止について

送付先の住所変更・購読中止の場合には、変更内容を明記の上、本会広報室までお知らせください。  
Eメール  
thsa-koho@msj.biglobe.ne.jp  
FAX 03-3269-7562  
お電話(03-3269-1131)でも承っております。







# 250回を 迎えた ヘルスケア 研修会



宇宙飛行士が長期滞在している国際宇宙ステーション ©JAXA/NASA

健康管理コンサルタントセンターと本会が主催するヘルスケア研修会が、7月10日に250回を迎え、東京・千代田区で記念講演を開催した。ヘルスケア研修会は、1968(昭和43)年に「成人病予防講演会」としてスタートして以来、職域における健康管理や健康支援の充実を目指し、その時代時代の職域保健での課題や問題、トピックをテーマに専門家に講演してもらおうと共に取り組んできた。参加者は、産業界、保健師、看護師、管理栄養士などの専門職の他、健保組合や一般事業所の健康管理スタッフなどで、こうした多くの方々を支えられ、ヘルスケア研修会は45年間続いてきている。記念講演では、宇宙航空研究開発機構・人事部健康増進室主任医長の村井正医師(写真)を講師に招き、「宇宙医学から学ぶ健康管理」と題する講演を行った。

## 「宇宙医学から学ぶ健康管理」 テーマに記念講演



2000年から国際宇宙ステーション(ISS)での宇宙飛行士の滞在が始まり、来年には若田光一宇宙飛行士が日本人初の船長となる予定である。ISSには、宇宙飛行士が長期にわたって滞在しているが、健康管理はどう行われているのだろうか。

村井正医師は、「①宇宙飛行士の長期滞在を視野に入れた宇宙で人間に起こる心理学的・生理学的変化の3つを満たすのが宇宙飛行士への医学管理だ。医学管理には健康管理をはじめとする労働衛生の3管理やヘルスプロモーション、メンタルヘルス対策が含まれる」と説明。

その上で「適切な医学管理を行うには、真空、無重力、宇宙放射線、温度の変化、長期間の閉鎖隔離環境、異文化の共存など、宇宙やISSな

どの環境の特徴を把握していることが必要だ」と話した。また、宇宙滞在が人間に与える影響として、体液シフトによる起立耐性の低下、宇宙酔い、骨粗しょう症変化、筋肉の委縮や筋力の低下、宇宙放射線による被ばく、多文化閉鎖環境による精神的影響などをあげ、「これらを踏まえて、可能な限りの予防対策を講じている」と語った。

### 各分野の専門医による 「学校保健相談室」 で支援

本会

で支援

このため本会では、検査や健診の事後指導の一環として「学校保健相談室」を設置し、腎臓病、心臓病、貧血、脊柱側弯症、肥満・コレステロールについて専門医による診療や相談を行っている。

さらに、貧血に関しては日本医科大学小児科の前田美穂教授による「貧血電話相談室」を新たに開設し、看護教諭や保健師からの相談に応じ

発のこれまでの歩みと今後の課題などが示された。

職場の健康管理を進める上でも現状の把握と起こりうる課題の想定が基本となる。参加者は予防対策の重要性を再確認していた。

講演では、その他、宇宙開

本会は学校保健安全法に基づき各種の検査や健診を行っているが、看護教諭や保健師から「学校の検診で異常を指摘されたが、近くに専門医がいらない」「大学病院は混雑していて予約が取りにくい」「経過観察が必要と言われているが、どこで診てもらえばよいかわからない」などの声も寄せられる。

## 「東京都予防医学協会賞」 PKU親の会・関東総会で4人を表彰

新生児マス・スクリーニングは、出生後に障害を生じる恐れのある代謝異常症を早期発見し、食事療法でこれを予防するのが目的である。これによって患児は正常な子どもと同様な発達・成長ができるが、食事療法は生涯続けなければならない。本人と家族にとってはかなりの負担である。

このため本会では、20年以上も食事療法を続け、社会で活躍している方々に、毎年「東京都予防医学協会賞」を

贈り、その努力を称えて、治療の継続を支援している。今年7月27日に東京で開催されたPKU親の会・関東総会で4人に賞状と副賞、記念メダルを贈り、表彰した。

学校の試験などで表彰式に参加できなかった受賞者2人から、感謝の手紙が会の主催者に届いたので要約して紹介する。

「このように二十歳を迎えることができたのは、多くの方々の支えがあったからだ」と



「夏祭り」で輪投げを楽しむ子どもたち

今、改めて感じています。小学校では食事制限のために給食を食べることができず、毎日弁当とミルクを持参しての登校は心に重かった。しかし、クラスのみんなは僕を理

解してくれて食事制限を続けることができました。中学、高校は弁当が当たり前で楽でした。大学生になると自由で、仲間たちと充実した活動を楽しんでいきます(Kさん)

「中学生の頃、先輩がこの表彰を受けた時のスピーチを聞かれて、今の自分がいま

「夏祭り」で輪投げを楽しむ子どもたち

「この他、総会では「夏祭り」が開かれ、普段は食べられないアメリカンドックや焼きそばなどが食事療法に基づいて提供され、子どもたちは嬉しそうに食べていた。

## ALCA だより (2) 金子昌弘 本会呼吸器科 低被ばくCT 導入以前

ALCA(東京から肺がんをなくす会)は、1975(昭和50)年9月に発足しました。当時から欧米では肺がんが増え、おそれ、国立がんセンター病院(当時)の池田茂先生らは、生活習慣の欧米化に伴い日本も肺がんが急増するであろうと考え、その対策として精密な肺がん検診を行うことを提案しました。

当時は、肺結核を対象にした間接X線写真での検診が行われていたが、画像も小さいので早期の肺がんの発見には不向きでした。また、肺門部と呼ばれる太い気管と重なる部分も見えな

具体的には、40歳以上の方法で年に2回、定期的な検診を行いました。

X線や喀痰細胞診で異常が認められた場合には、ただちに国立がんセンター病院に紹介され、池田先生が世界で最初に開発した気管支ファイバースコープなどで、がんかどうか診断し、がんの場合は手術を中心とした治療が行われました。

X線では異常がなく、喀痰細胞診だけで発見され、病巣が気管支の表面に限られていた場合には、気管支鏡を通じてレーザーによる治療も行われました。

このようにALCAは当時から最先端の肺がん検診と治療を行ってきました。

## 学校保健相談室のご案内

「学校の検診で経過観察が必要だと言われたが、専門医のいる病院はないか」「大学病院は混雑していて予約が取りにくい」...という声にお応えし、各分野の専門医が診療や相談を行っています

腎臓病相談室	心臓病相談室	貧血相談室	脊柱側弯症相談室	肥満・コレステロール相談室
担当医 村上睦美 日本医科大学名誉教授	浅井利夫 東京女子医科大学名誉教授	前田美穂 日本医科大学教授	大塚嘉則 国立病院機構 千葉東病院名誉院長	岡田知雄 日本大学医学部教授
外来日 第3木曜日午前	第1木曜日午後	第1水曜日午後	第2火曜日午後 第4水曜日午後	第1金曜日午後

### 前田美穂先生の 貧血電話相談室

第1水曜日 14時半~15時半  
看護教諭、保健師、看護師からの相談をお受けします(無料)

検査や診断には費用がかかります(保険診療)。本会で学校検診をお受けになった方は、検査・健診時のデータを用いて診療や相談が可能です

問い合わせ・申し込み 公益財団法人 東京都予防医学協会 学校保健部 電話 03-3269-1131 東京都新宿区市谷砂土原町1-2